

W. S. モームの小説の歴史的概観

— その二 1915年から1938年まで —

脇田 勇

W. S. Maugham の小説、主として長編小説を取上げ、その創作技法、思想内容の変遷を考えようとする小論を『人文研究』第31輯に発表して以来10年の時が流れた。この作者の長篇小説を考える上で、三つの時期を設定、*Liza of Lambeth* (1897) を発表してから、第1次大戦勃発までを第1期とし、この間に発表されている *The Hero* (1901), *Mrs. Craddock* (1902), *The Merry-Go-Round* (1904), *The Bishop's Apron* (1906), *The Explorer* (1907), *The Magician* (1908) などにつき前稿では論及した。

この小論においては、第2期として1915年から1938年まで、即ち第1次大戦から第2次大戦に至るまでの期間を設定、この間に刊行された長篇小説 *Of Human Bondage* (1915), *The Moon and Sixpence* (1919), *The Painted Veil* (1925), *Cakes and Ale* (1930), *The Narrow Corner* (1932), *Theatre* (1937) などについて言及しようとするものである。

Of Human Bondage

Maugham の最大の長編で、代表作でもある *Of Human Bondage* については、すでに『人文研究』第47輯、第49輯、第51輯、第52輯、第55輯に「*Of Human Bondage* 試論」I, II, III, IV, V の5回にわたり小論を発表しているので、この稿では詳説をさけることにした。

世界大戦のさ中に発刊されたこの作品は、はじめ読者の注意をさしてひくに

至らなかったのであるが、米国の小説家 Dreiser が *New Republic* 誌において第一級の傑作と称賛したことによりこの小説の評価が高まり、英文学史上の古典作品の一つに数えられるようになったのである。*Lady Frederick* が舞台にのせられ一年以上のロングランとなり、彼の人気は上昇した。途端に Maugham は週に数百ポンドの収入を得る劇作家にのし上ったのであるが、心の中に怏怏として晴れやらぬ雲のようなものがおそいかかっていた。人気劇作家としての地位が確立するとともに過去の生活に対する追憶にとりつかれはじめる。母との死別、一家の離散、どもりに苦しんだ低学年の学校時代、はじめて青春を謳歌した Heidelberg 大学時代、ロンドンにおける医学生時代の退屈な数年間、それらが、睡眠中、散歩中、舞台稽古の時、パーティに出席している時と、あらゆる場所と時間を問わず彼を襲ったのである。彼が大きく飛躍するためには、この追憶のうちに甦る懊悩のカタルシスが必然的な運命となってあらわれたのである。彼は1912年から2年の時間をかけ、1914年に完成し1915年公刊することになった。

おそらく *Of Human Bondage* は Maugham 作品の頂点と言ってよいであろう。Maugham 自身の内面的観照も、この時期が頂点であったと言える。このあと、*The Moon and Sixpence* や作者自身が自作の中でもっとも愛好した *Cakes and Ale* を書いているが、*Of Human Bondage* のバリエーションの色彩が濃い。この小説の主人公 Philip Carey はさまざまな bondage から解放されて、精神の自由をかちとって行くのである。一は信仰からの解放、二は芸術からの解放、三は恋愛からの解放で、この解放を通して生長して行く姿に、一般大衆から知識階級に及ぶ多くの読者が共感を覚えたことが、この作品の評価を高めた所以とすることができる。

Of Human Bondage は、芸術的に最高のものとは言えないにしても、Maugham のもっとも重要な作品であることに変わりはない。*Cakes and Ale* は時と場所の適切な変化があり、皮肉は美しく抑制され、言葉は自然な表現力に富んで、より巧みに書かれているが、*Of Human Bondage* の涉猟する範囲は、はるかに普遍的な重要なテーマである。Philip が脱出しなければなら

ない一番の強い枷は、意味のない世界に意味を見出そうとする人間の持つ当然の欲求の形をとっている。人生に意味はない。その意味は個人から生ずるもので、永遠的あるいは絶対的なものから生ずるものではないと認める時に、はじめて解放が訪れてくるのである。

『人文研究』の「*Of Human Bondage* 試論」なる拙稿で、*The Summing Up* の終りの3章の基盤になっている「真、善、美」についての Maugham の哲学が、この作品を構成していることを述べた。真の世界は、Heidelberg 時代、詩人の友 Cronshaw との人生問題についての討論、哲学的探究、大英博物館での開眼が該当する。美の世界は、彼のパリ滞在の時期に導入され、彼の哲学と生活の型のきわめて重要な部分となる。善はこの小説の後半の中心課題で、Mildred と Athelny 一家とのコントラストで示される。Philip の生活の歩みは多くの種類の拘束の絆をはぎとることにあり、最後にはほとんど自由な人間になる。因襲と慣習に順応しなければならない環境とその圧迫からの逃避に成功したのである。宗教的教義を否定し、人生に意味をみつけようとする欲望から解放され、自分が生きることのできる哲学が展開してくる。自分の不具から生れる桎梏から解放され、むしろその苦しみを受容できるようになる。

Of Human Bondage は *Cakes and Ale* や多くの短篇で示された職人芸の巧妙さはないにしても、人間存在の基本的問題を扱っているし、作者が、自分の自惚、俗物根性、劣等感、自己憐憫、マゾヒズムを飽くなきまでに暴露し、最高の自伝的小説にまで練りあげた点で、彼の代表作の名に恥じないものである。

The Moon and Sixpence

この作品については、『人文研究』第56輯の拙稿「*The Moon and Sixpence* 覚書」で、愚見を開陳したので、ここでは詳述をさける。

The Moon and Sixpence は、Maugham のしばしば用いた第一人称単数

で書かれた最初の作品である。画家 Paul Gauguin の芸術家としてのひたむきな生きざまに触発されて、創作の筆を取ったことはまちがいが、この小説の主人公の Strickland と Gauguin との間はかなり事実のくいちがいのあることからみても、小説の形で書いた Gauguin の伝記とは言えない。Gauguin について取材した話に基づいてはいるが、その主だったものだけを用い、作家の創作力が肉づけしたフィクションと考えるのが妥当であろう。*The Moon and Sixpence* は *Liza of Lambeth, Of Human Bondage* につぐ Maugham の第三番目の長編で、この作品により、彼の作家としての地位がゆるぎないものとなった。R. L. Calder は、20世紀はじめの *Kunstlerroman*（芸術家物語）の流行にふれ、Maugham のこの作品は、芸術家を写実的に取扱ったもっともすぐれた例のひとつであると激賞している。⁽¹⁾ Richard A. Cordell も指摘している所であるが、この小説を読みかえてみて、ほとんど半分位の分量が、Dirk Stroeve と妻 Blanche というオランダ人画家夫婦についての叙述、すなわち Strickland と不貞をおかす妻の物語に、費されていることに一驚する。その他 Nichols 船長の冗舌とか海の流浪者についての随想とか Abraham 医師のエピソードなどの副次的要素の多い点、構成上の乱雑さに気付くのである。それにも関わらず最後の一頁まで読者をひきこんでしまう魅力を考えてみると、作家 Maugham の筆力を感じざるをえない。この小説は、第一次大戦直後の英国人のすさんだ精神を癒す十分な力を持っていて、出版当初から好評で、*Of Human Bondage* を問題にしなかった批評家も、この作品には賞賛を寄せ、一般読者大衆も、Maugham なる作家の存在を強く印象づけられた。Calder は、第一次大戦という異常事態に対する幻滅感とますます増大する機械化と産業化が本能的な性格を破壊しつつある危機感からかもし出された一種のロマンティズムと解説している。

The interest in these artists—in their individuality, creativity

(1) Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest of Freedom*, Heinemann: London 1972, p.134.

and rebellion—was a form of romanticism engendered by the disillusionment of the First World War and the feeling that increased mechanisation and industrialisation were destroying these instinctual qualities.

(2)

The Moon and Sixpence は Maugham の南海と極東に関する関心のさきがけをなすもので、*On a Chinese Screen* (1922), *The Painted Veil* (1925), *Casuarina Tree* (1926) とともに、戦後の読者に精神的逃避の場を与えたものである。19世紀のロマンティシズムの一面として、exoticism があげられるが、まさにこれに等しいものを当時の読者のうちに見出すことができる。Maugham はパリとタヒチで収集した話の断片を利用し、それを想像のオブラートにくるみ、この作品を完成したのである。

Maugham は、はじめの数章をつかって、主人公 Strickland をとりまく家族、義務、名誉心、因襲を描き、ついにこの社会的環境を弊履の如く捨て、自分の一家に対していかなる責任も義務も認めようとしない点、Strickland は20世紀の芸術家の典型である。この作品のなかほどで、芸術家と道德の問題にふれ、Strickland と Stroeve 夫妻との関係において、この問題をギリギリの限度まで拡大している。偉大な芸術から利益を得るため、社会はどこまで芸術家の反社会的行為を容認すべきかという問題にふれて行く。Strickland の表面的には残忍、野蛮で弁護の余地のない行為が、正当化され弁護の道具になるのが Stroeve 自身である。妻の死後、夫 Dirk は自分のアパートで Strickland 画くところの妻の裸像を見、それを破棄しようとは一時は思うが、芸術の大傑作であることを認め思いとどまる。善良な男と女の幸福とその犠牲で傑作が誕生することのいずれを選択するかという場合、Maugham は傑作の絵を扱んだということである。またこの作品に現れる三種類の女性、すなわち Strickland 夫人、Blanche Stroeve、主人公と結婚する土人の女 Ata であるが、この三人の女性に対する Strickland の反応に、Maugham の女性観をうかがわせるも

(2) Ibid: p.134

のがある点も、この小説を考える視点の一つである。

The Painted Veil

The Painted Veil は *The Moon and Sixpence* に次いで1925年出版された作品である。Maugham は 1920年中国旅行をし、その所産として *On a Chinese Screen* (1922), 北京を舞台にした戯曲 *East of Suez* (1922), そしてこの作品を刊行している。タイトルは Shelley のソネットから取られたことは、同書の扇からも明瞭である。

“Lift not The painted Veil which those who live Call
Life: though unreal shapes be pictured there, And it but
mimic all we would believe With colours idly spread,—
behind, lurk Fear And Hope, twin Destinies.” (下線筆者)

On a Chinese Screen は書物を書くための材料という体裁をとっており、その中の ‘The Nun’ に出てくる尼僧は、*The Painted Veil* にある尼僧の原型であるし、‘Dawn’, ‘The Inn’ と題する各章のスケッチ風描写は、*The Painted Veil* では推敲されて、美しい叙景として取入れられている。この作品は英国では ‘Nashe’s Magazine’ に1924年12月から翌年7月まで、米国では ‘Hearst’s International’ に1924年11月から翌年3月まで連載され、1925年 Heinemann, London から出版されている。

Maugham は中国の異様な美しいものを鋭く観察し、かつ英国の植民者たちをつき離れた態度で描写している。この小説の構想が Dante の『神曲・煉獄篇』の一句からヒントを得たことは「序」の中で語っている通りであるが、「人物よりもむしろ話が面白くて書き初めた小説は、今まで書いた中でこれ一つだと思う」と言っているように、彼の小説としてはもっとも通俗的な興味に

(3) W. Somerset Maugham: *The Painted Veil*, Heinemann: London, 1967, Preface x.

あふれた小説であると言える。

ヒロイン Kitty は英国の弁護士娘で、父親は権勢のない人間であるに反し、母はしたたかな野心家で、夫の出世をこい願ひ、その度に失敗をくり返し、望を娘の Kitty と妹の Doris に託するようになる。Doris は不器量であるが、Kitty は美人で、多くの求婚者が彼女を取まくが、意中の人材があらわれない。そのうちに妹は社交界にデビューしてある baronet と婚約してしまう。そこに Kitty の相手として、香港に住み休暇中の細菌者 Walter なる人物があらわれる。Doris が婚約し、自分が独身でいることにたえきれず、Walter の求婚に応じて香港に発つて行く。現地に戻ってからの夫は Kitty をやさしく遇するが、Kitty は中年の好男子 Charles と不倫の関係を持つに至る。その頃中国の奥地の梅丹府にコレラが発生、病にたおれた宣教師の代りに行くことになった夫から奥地行を促される。Kitty は夫にあなたと何故結婚したか知っているかと問いかけるが、夫は、Kitty の胸の中を見ぬいて、「妹の Doris より先に結婚したかったからだろう。君が馬鹿で頭が空だということを知っていた。だが僕は君を恋したのだ。Charles は君と結婚なんかしないよ」と言われてしまう。Charles Townsend 夫人が Charles と別れるという確証があれば、自分は離婚してもいいという言葉聞き、Charles に意志をただが、Walter の予想通り、出世欲に強い Charles はエゴイストの正体を暴露してしまう。失望の極に達した Kitty は夫につきそって奥地に出向いて行く。梅丹府では税関長の Waddington と知り合う。彼はシニカルで陽気な小男である。カトリックの修道院で修道女たちの献身的な姿にいたく感動する。Kitty は病人の看護を院長に申し出て許され、忙しく働いているうちに、自分の生長を意識する。作業中突然気分が悪くなり、途端にコレラを予感するが、実は妊娠していると知らされる。Walter は護衛をつけるから香港に戻るようすすめるが、彼女は修道院の仕事の続けると言って断わる。ある晩夫の帰りを待っていると Waddington が訪ねてきて、Walter がコレラにかかって危篤であると告げる。Walter の死の近いことを知った Kitty は、彼と和解して平和な臨終にしてやりたいと思う。瀕死の夫に許しを乞うと、夫は消えい

るばかりの声で「死んだのは犬だった」とつぶやく。次の日 Walter の埋葬があり、Kitty は Waddington と死や靈魂について語り合う。永遠の生命がなければ、あの修道女たちは空しいもののために一生を捨てたということになるのだろうかと問いかける。彼は、あの人たちが目指しているものが空しい幻であっても一向かまわない。それはあの人たちの生き方そのものが、それだけで美しいのだからと答える。一週間後、Kitty は香港に帰り本国に帰るようすすめられる。香港で彼女を迎えたのは Charles の妻で、Kitty は彼女から奥地での勇敢な奉仕に対する賞賛の言葉をうけ、Kitty に対する今までの誤解についての謝罪をされる。Kitty は久しぶりに Charles に会う破目になる。あれほどつれない処遇をされ、軽蔑を感じていながらも、彼に言い寄られると、その腕の中で法悦を感じてしまう。二日後出帆の船で香港を発ってゆく。途中マルセイユで母の死をしらせる電報を受取る。故郷に戻った Kitty は父からバハマ諸島の首席判事として赴任することを聞き、父に同伴したいと申しでる。そしてバハマ諸島の青空のもとで女の子を生み、その娘は自分のような意地悪な厭な女でなく、大胆で率直な人間として生きて欲しいと心境を吐露する。彼女は、過去の愚かな行いも、不幸に苦しんだことも、おぼろげながら前途に認めた道を迎えることができれば、必ずしも無駄ではなかったという諦観を持つことができ、Waddington が言った如く、何処へも通じてない道ではなく、修道女たちが謙虚に辿っている道であり、平安へ通ずる道と悟るところでこの小説は終る。

この小説を興味本位の通俗小説ときめつけてしまうのは当らない。この小説の後半で、恋人 Charles のエゴイズに絶望した Kitty が、その懊惱から立ち直って、新しく生きる喜びを見出すまでの心理的過程が描かれて行くところに文学作品としての価値が認められるし、その同じ Kitty が香港で Charles との再会となり、彼の挑発的な誘いに肉体的陶醉を感ずるというのは、人間性の不可解を追究する Maugham の筆法のあらわれと言ってよく、人間性の本質に迫るリテリティを覚えさせる場面である。

Of Human Bondage における詩人 Cronshaw の如く、この小説にも

Waddington なる人物が登場し、皮肉な言葉を語らせている。Cordell は、かかる人物を *raisonneur* or chorus (理屈屋) と言っているが、多くの場合作者の代弁者⁽⁴⁾とすることができる。夫の死後 Kitty の問いに答える Waddington の答の中には、Maugham の思想がうかがえるのではあるまいか。

"I wonder. I wonder if it matters that they (the nuns) aimed at illusion. Their lives are in themselves beautiful. I have an idea that the only thing which makes it possible to regard this world we live in without disgust is the beauty which now and then men create out of the chaos. The pictures they paint, the music they compose, the books they write, and the lives they lead. Of all these the richest in beauty is the beautiful life. This is the perfect work of life.

(下線筆者)

(5)

Cakes and Ale

この作品についても筆者は、『人文研究』第27輯に「W.S. モーム作『お菓子とビール』に関する覚書」という小論を發表している。そこでは Ashenden の名のもとに作者が登場する第一人称小説の手法と Edward Driffield の最初の妻 Rosie という不羈奔放にして魅力あふれる女性に焦点をしぼり、愚見を述べた。

この作品の Modern Library 版の序で、Maugham は、*Of Human Bondage* が、私の最大傑作であって、作者が生涯に一度しか書けないようなものであるが、自作のうちで一番好きな作品は、この作品であると自賛している。

...I am willing enough to agree with common opinion that *Of Human Bondage* is my best work. It is the kind of

(4) R. L. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana Univ. Press, 1969, p. 144.

(5) W. S. Maugham: *The Painted Veil*, p. 233.

book that an author can only write once. After all, he has only one life. But the book I like best is *Cakes and Ale*. It was an amusing book to write. I found it a pleasant task to surmount the difficulty of dealing with events that had taken place long ago and events that took place thirty years later without losing the sense of continuity which is necessary if you hold your reader's attention.

(6)

平生それほど親しくもない作家仲間の Alroy Kear から電話があつて会うことになる。それがきっかけで、昔の思い出が色々浮んでき、その回想が現在の事件と巧みに織りなされて話が進行して行く。その間に、Rosie などの変化に富んだ人物の登場があり、story-teller の面目躍如たる小説ということが出来る。

この小説が、Thomas Hardy, Hugh Walpole がモデルとなり、Edward Driffield, Alroy Kear として描かれたということで、物議をかもし、特に Walpole などは、「ひとつの会話にはまさにはっきり私の声の調子がいっている」とまで言って Maugham に抗議の手紙を書き、作者は Walpole に返事を書き、それを否定する一幕もあった。Hardy と Driffield はその経歴に類似点はあるにしても、相異点のあることも事実であったが、Driffield の肖像は Hardy 信奉者の心を傷つけ、多くの批評家、コラムニストが論ずる問題にまで発展した。この作品は20世紀初頭の30年間の英国の社交界、文学界に関する風刺であり、そのモデルとして想像されるその時代の多くの有名人が、かなり明確な素描か、合成的肖像の形で登場すると言った方が妥当であろう。勿論 Maugham は特定のモデルを頭において書いたものではないことを強調している。

この作品のもう一つの特長は、時代背景の描写で、Victoria 時代の田舎の風景、Edward 時代の社交的、文学的習慣、その20年後の George 時代の場面を組みいれている。大部分の行動は、一人称の Ashenden の記憶の中で起

(6) W. Somerset Maugham: *Cakes and Ale*, A Modern Library Book, 1950, Introduction, pp. xi~xii.

り、文学的技巧をほとんど意識せずに、読者は、作者の跡を追って行くことになる。

Cakes and Ale の Driffield と *The Moon and Sixpence* の Strickland の芸術家としての対比を試みたのは R. L. Calder である。Driffield は、だんだんわな⁽⁷⁾にかけられ、最後に因襲の絆にがんじがらみにされ、ついには執筆を放棄するに至る。Strickland がとった方向を完全に逆にしている。Strickland はあらゆる障害を克服し、完全に自己を表現できるようになる。これと対照的に、Driffield は、文学界、社交界に組みこまれ、公開の席で演説し、名士を追いまわす有閑夫人たちのお茶の会に出席し、特に Barton Trafford 夫人の影響をうけることになる。Blackstable にいた頃の Driffield の片鱗だになく、その変貌を Ashenden は敏感にとらえてゆく。Maugham は、Driffield の生涯の進んだ道と彼が自分の中に閉じこもってしまった姿を次の如く描き出している。これは25章の一場面、Ashenden と Kear が Driffield の写真を夫人から見せてもらっている所に出てくる。

You saw his face grown thinner and more lined. The stubborn commonplace of early portraits melted gradually into a weary refinement. You saw the change in him wrought by experience, thought and achieved ambition. I looked again at the photograph of the young sailorman and fancied that I saw in it already a trace of aloofness that seemed to me so marked in the older ones and that I had had years before the vague sensation of in the man himself. The face you saw was a mask and the actions he performed were without significance. I had an impression that the real man, to his death unknown and lonely, was a wraith that went a silent way unseen between the writer of his books and the man who led his life, and smiled with ironical detachment at the two puppets that the world took for Edward Driffield. I am conscious that in what I have written of him I have not presented a living man, standing on his feet, rounded, with comprehensible motives

(7) R. L. Calder: op. cit., pp. 246~247.

and logical activities; I have not tried to: I am glad to leave that to the abler pen of Alroy Kear.

(8)

真実の Driffield は、最後まで人に知られず、あの作品を書いた作家としての彼と、あのような生活を送った人間としての彼との間をつかずはなれず黙々と歩いていった幽霊のようなもので、世間が Edward Driffield と考えていた二つの操り人形を笑っていたと Ashenden には考えられてきて、一個の生きた人間を描いたという自信を喪失した姿を映し出している。

The Narrow Corner

The Narrow Corner は Maugham 58才の時の作品である。タイトルは Marcus Aurelius の「されば人の生くるは東の間にして、その住家は地の片隅のみ」という言葉からとったものらしい。1917年以来7回にわたる極東、南海への旅行の体験が素地となって書かれた作品であり、舞台となったカンダ・メイラ島は、バンダ海のバンダ・ネイラ島であって、この島に関しては *A Writer's Notebook* の1922年の頃に、その島のオランダ人の大理石の屋敷やポルトガル人の砦の描写が出てくる。Maugham の円熟期の長編として、*Cakes and Ale*, *The Painted Veil*, *Theatre* とともに、story-teller の本領が遺憾なく発揮されている作品である。旧オランダ領東インド諸島の一島に住む、ヨーロッパ社会からの流れ者の生態と心理が、巧みに描き出されている点が特徴である。Maugham の分身と考えられる Dr. Saunders が登場し、傍観者の立場で眺めている。彼は *On a Chinese Screen* にも現われるし、Captain Nichols は *The Moon and Sixpence* 創作の際、早くも着想されていた事から判断して、この長編は完成まで10年の年月熟成を待っていたことになる。

(8) W. Somerset Maugham: *Cakes and Ale*, Heinemann, 1963, pp. 246~247.

Dr. Saunders は中国で眼科医として働いている短軀小身の容貌のさえない男である。東南アジアのある島の金持の華僑の白内障の手術で1万ドルをかせぎ、帰途につく所から話ははじまっている。メラウケ行の船を待っていた Dr. Saunders は、東洋で長く船乗りをしていた Captain Nichols ともう一人 Fred Blake という美青年に出会う。Saunders は Nichols から悪妻に悩まされ胃弱になった経緯と Fred と親しくなった事情を聞かされる。3人をのせた帆船は Kamda-Meira 島に到着する。そこでオランダ商会の代理人 Erik Christessen という理想家肌の男と知りあう。Erik によって大農園の経営者 Frith に紹介される。彼は義父の Swan, 娘の Louise とともに広大な屋敷に住み、インド哲学などを研究している変わり者である。Fred はその娘の Louise に一目惚れしてしまうが、Erik から実は彼女は自分と婚約中なのだと打明けられる。Erik は結婚のあかつきには、デンマークやイギリスへ新婚旅行をしようと夢を画いている。Erik は、Frith の屋敷で Fred と Louise の逢引を目撃し、失意のあまり自殺をとげる。友情を感じはじめていた Erik を殺したのは自分だという良心の呵責から、過去において、オーストラリアで殺人の罪を犯したことを告白する。Fred は Sydney の有名な政治家の息子で、前途有為な青年であったが、ある代議士の妻と不倫の恋におちいり、その夫に発見され、はずみで射殺したというのである。一切を父に相談すると、選挙を前にした父は、ある手段を講じてオーストラリアを脱出させたのである。Captain と Fred は帆船で出発し、Saunders は、自分の乗る船までの空時間、Frith の所に別れを告げに行く。そこで、Louise から Fred のことは別に罪とは思わない、それどころか Erik が自分勝手に夢想して押しつけてくる理想像から解放されて自由を感じているという告白を聞かされる。それから一ヶ月後、シンガポールのホテルで、Saunders は Captain に再会する。Fred の消息を頼ねると、航海中水死したという。Captain は今度こそ脱出できたと思った悪妻を目の前にして真青になっていたのである。去り行く Captain の姿を眺めながら、Saunders は、人間の運命がどんな絢爛たる夢を実現しようともそれは畢竟幻影に外ならぬと感慨にふける所でこの話は終る。

Of Human Bondage における Philip Carey, *The Moon and Sixpence* の Strickland の場合の如く、この小説では一人の主人公に焦点をあわせず、多くの群像が平等な重みで話の中で動いている点が特徴である。全体を流れているものは虚無感とでも言うべきもので、人間の情熱のはげしさや美しさにも拘らず、それが結局何かはかない幻影のように空間に消え去ってゆく様を皮肉なまなざしで見ている作者の態度を認めることができる。この作品は Dr. Saunders の太平洋における旅行を軸に構成されているが、この医師は非倫理的な営業の故に、医師登録簿からけずられている人物である。しかし、この人物に、作者は彼自身の多くの哲学を語らせている点注目すべきであろう。

Cordell のこの作品についての評価はかなり高い。⁽⁹⁾ *The Narrow Corner* は Maugham の作品中もっとも低く評価されているが、この作品ほど人間の行為、動機に対する入念な分析を機知、哲学、神秘、ヒューモアと打って一丸としたことはないにと言い、Maugham のもっとも楽しい小説の一つであるとも付言している。

Dr. Saunders は神秘思想に興味をもち、次第に仏教思想にひきこまれて行く。最初に、これは阿片に耽けることで示される。これにより、彼はある種の神秘体験を味わう。Maugham は仏教の哲学を、日本人の真珠貝採取の潜水夫の死のエピソードに導入している。しかしはっきりした仏教思想のあつかいは、Kamda-Meira を夢みている学者 Frith を通してあらわれる。この小説は彼がシンガポールの Van Dyke Hotel のテラスで腰をおろす所で終わっているのは前述の通りであるが、この最後の数行は仏教の教義そのものとも言える言葉で終わっている。

He sighed a little, for whatever it was, if the richest
dreams the imagination offered came true, in the end it
remained nothing but illusion.

(10)

(9) R. L. Cordell: op. cit., p. 146.

(10) W. S. Maugham: *The Narrow Corner*, Heinemann: London, 1967. p. 248.

Calderが、情熱、幻滅、殺人の表面的な物語にもかかわらず、*The Narrow Corner* は哲学的小説の気配が濃厚であると言った意味も、この間の事情を語っていると言えるのではないか。

Theatre

Theatre は Maugham の14番目の長編小説で、1937年すなわち作者63歳の時発表されている。このあと *Christmas Holiday* (1939), *The Razor's Edge* (1944), *Then and Now* (1946), *Catalina* (1948) などの長編を書いていることからみても、もっとも脂の乗りきった時の作品と言って過言ではない。1937年ニュー・ヨークで Helen Jerome により舞台用の喜劇となり、1942年 Guy Bolton は舞台のためにそれを演出し、1951年 *Longer Than Life* として書きなおし、1950年代 Sanvajan によって舞台のために翻案が書かれ、パリで3年間連続上演されている。

Cakes and Ale が文壇の裏面を扱ったとすれば、*Theatre* は劇壇を暴露したとも考えられるが、この小説は、舞台女優 Julia の様様な愛を扱った小説と見るのが妥当であろう。

46歳の姥桜になった女優 Julia が、劇場の事務室ではじめて Tom 青年に出会い、彼にサイン入りの写真を与えるために写真の束を見て行くうちに物語の場面が、映画のフラッシュ・バックのように過去に戻り、Julia の回想がつづられて行く。2章から9章までは追憶の形で語られ、再び10章から現在に戻ってくる。夫 Michael に対する愛情を失い、新しい相手を求める所で9章が終り、10章は Tom から花束が届けられることで幕があき、29章までの間に、Tom を相手とする愛欲の葛藤がポイントとなってくる。

このヒロイン Julia の愛の対象として三人の男性が登場する。夫 Michael, プラトニック・ラブの相手となる貴族 Chales Tamaly, それに若い燕の Tom である。夫 Michael とは協力して劇場経営の夢をいただくのだが、従軍してし

まう。彼女は若手女優として押しも押されもしない地位にのし上ってゆく。やがて帰国した夫を迎えた彼女は、夫の肉体に中年男を意識し、夫以外に愛の対象を求めることになる。夫婦は **Michael** の父の遺産を資本として、ロンドンで劇場の経営に乗り出し、経済的にも安定してくる。しかし生活が安定すると **Julia** は経済上の才と自分の容姿に自己満足を感じている夫に不満を感じはじめる。10章に入ると、時代は現代に戻り、純情そうに見えた **Tom** の大胆な求愛にあい、関係を持ってしまう。これを契機に二人の間には恋愛関係が芽生えてゆく。彼女は最初のうちは冗談のような情事と高をくくっているが、**Tom** を真剣に愛するようになってしまう。**Tom** は社交界の面白さがわかってくると、**Julia** を愛の対象としてより、社交界に出入りするための手段と考えるようになる。**Tom** は若い女に惹かれてゆき、**Julia** の愛を利用してその女を舞台に登らせるように頼んでくる。恰度出演している芝居の中で男と別れる場面があったので、自分の **Tom** への思いをこめて感情的に演技する。夫からは、あれは barn-storming (田舎芝居) だと酷評される。実生活の感情を舞台にぶちまけてもそれは芸術にならぬことを思い知らされ、ロンドンを後に、母親の住むフランスのサン・マロに休養に行く。ここで **Tom** への気持も冷静に整理できるようになる。滞在中 **Tamaly** 卿から愛情のこもった便りが届く。彼は **Julia** の結婚前からの賛美者で、彼女を教養豊かな人間にしてくれた紳士である。ロンドンに戻った **Julia** は20年来彼女に愛情を持ち続けてきたその **Tamaly** 卿を誘惑してみるが、**Charles** の気持は燃え上らない。自分の性的魅力が失われたのかと考えて、厚化粧をしてロンドンの下町に出かけてゆく。寄ってきた男は、自分の恋人のため有名女優のサインをほしがっているのに過ぎなかった。ロンドンに戻る前から準備が進められていた芝居がいよいよ上演されることになり、**Tom** の恋人の **Avice** を夫の反対を押しきって共演させ、**Julia** は徹底的に相手を圧倒し、再び舞台に立とうという野心を粉碎してしまう。**Julia** の演技に感激した **Tom** は謝罪に来て再び **Julia** に言い寄るのだが、これを一蹴し見事な復讐をなしとげる。最後は、愛欲の絆から解放された **Julia** が旺盛な食欲を発揮し、禁断のビーフ・ステーキやフライド・ポテト

をがつつ食べるシーンとなって幕切れとなる。

Theatre の結末は、*Mrs. Craddock* や *The Painted Veil* の場合の如く、ヒロインが肉体的にも精神的にも自由の身になることで終る。Calder も、この最後の場面には惜しみなく賛辞を送っている。これがなかったらこの作品は不吉な作品になったであろうとまで極言している。⁽¹⁰⁾ *The Moon and Sixpence* の場合の如く、重要なテーマは芸術と愛情との関係である。Strickland のように、芸術的表現のなかに真の解放を見出すのである。

Aloof on her mountain top she considered the innumerable activities of men. She had a wonderful sense of freedom from all earthly ties, and it was such an ecstasy that nothing in comparison with it had any value. She felt like a spirit in heaven.

(11)

Bibliography

Texts

- Of Human Bondage*, Heinemann, London, 1966.
- The Moon and Sixpence*, Heinemann, London, 1966.
- The Painted Veil*, Heinemann, London, 1967.
- Cakes and Ale*, A Modern Library Book, 1950.
- The Narrow Corner*, Heinemann, London, 1967.
- Theatre*, Heinemann, London, 1967.

Reference Books

- Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana Univ. Press, 1969.
- Robert L. Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, Heinemann, London, 1972.
- 朱 牟田 夏 雄 編: サマセット・モーム, 20世紀英米文学案内, 研究社

(10) R. L. Calder: op, cit., p. 162.

(11) W. S. Maugham: *Theatre*, Heinemann: London. 1967. p. 293.